

住民による地域生活プロセス評価手法の試み 新潟県長岡市川口木沢地区の導入事例

草 郷 孝 好 ・ 宮 本 匠

Community Life Process Evaluation Method:
a pilot case study in Kawaguchi-Kizawa, Nagaoka, Niigata, Japan

Takayoshi KUSAGO and Takumi MIYAMOTO

Abstract

A community life process evaluation method was designed as a mechanism to promote local revitalization. This could help local residents to understand how their own community changes once an activity that aims at the local revitalization is introduced. Moreover, the performance of the activity could be evaluated and, if necessarily, the activity could be revised based on the evaluation. Authors have started a trial of this method in Kizawa, Kawaguchi, Nagaoka, Niigata Prefecture, hard-hit by the Chuetsu earthquake in 2004. This paper aims at explaining the needs of the people-led community development, providing an outline of the community life process evaluation method, and its baseline investigation survey conducted in 2010 in the Kizawa area.

Keywords: Local Revitalization, Endogenous Development, Capabilities Approach, Neighborhood Study Method (Jimotogaku), Process Evaluation

抄 録

住民主体の地域再生を促すためのしくみとして、地域生活プロセス評価手法を構想した。これは、地域活性化を目指す活動が開始された場合、その活動によって、地域がどう変化していくのかを住民自身で把握することができ、その結果、当該活動の良し悪しを住民自身が判断し、場合によっては、活動そのものを軌道修正していくためのしくみである。著者らは、2004年の中越地震で被災した地区の1つである新潟県長岡市川口木沢地区の協力を得て、2010年から本手法の試行を開始した。そこで、本論では、住民主体の地域再生の必要性とは何かを論じ、地域生活プロセス評価手法の概要と新潟県長岡市川口木沢地区における同手法の導入について、2010年に実施したプロセス評価のベースライン調査を基にして、概説する。

キーワード：地域活性化、内発的發展、ケイパビリティ・アプローチ、地元学、プロセス評価

1. はじめに～住民主体の地域創造への期待

2011年3月11日の東日本大震災によって、東北・北関東地方では、多くの地域コミュニティが被災した。現在も容易ならざる状況にあるが、地域生活の立て直しに向けた歩みを

進めていくことが喫緊の課題である。

大震災からの復旧や復興に際しては、必然的に地域外からの技術、資金、人的支援に頼らざるを得ない面はあるが、一過性にならない地域再生のためには、住民の地域再生過程への主体的な関わりが不可欠である。それは、いかにして住民の主体性を引き出し、持続的な復興、さらには、町の発展につなげていくかという課題である。

今回の被災地もその多くが、山間部や沿岸部の集落であり、日本の他の地域コミュニティと同様に、過疎化の問題が深刻な地域であり、高齢化する住民の手で地域活力をいかにして維持できるのか、が問われている。震災によって、さらに、厳しい局面に立たされているといえるが、地域をまもり、持続的な地域再生を目指す取り組みが必要とされている点に変わりはない。

住民主体の地域再生を進めていくためには、生活様式、地場の技術、知恵、歴史などの地域ごとの固有性を考慮することが必要となる。これは、固有性をつくりあげてきた住民自身が地域発展の方向性を検討し、地域づくりに取り組むことを意味する。しかし、地域固有性を活かした取り組みを展開することができるならば地域生活を改善していけるかどうか、この点は定かではない。そこで、何らかの地域立て直しへの取り組みを開始してから、その取り組みによって生まれる地域生活変化を住民自身で把握することができれば、その取り組みの成果を住民自ら評価できるであろうし、取り組みの成果あるいは課題を発見することにつながる可能性がある。

そこで、著者らは、住民主体の地域生活立て直しへの取り組みを支援する手法の開発に着手することにした。この手法は、何らかの住民主体の地域活性化活動が開始された場合、その活動によって、地域そのものがどう変化していくのかを住民自身で把握することができるものであり、その結果、当該活動の良し悪しを住民自身が判断したり、必要と判断されれば、活動内容に手を加えていけるしくみをいう。

筆者らは、このしくみを「地域生活プロセス評価手法」と名づけ、地域住民とともに地域おこしと住民の生活改善を目指す協働型実践研究（アクション・リサーチ）を開始することとした。新潟県長岡市川口木沢地区は、2004年の中越地震で被災した山間地区の1つの集落であり、地震発生から6年経過した2010年に地域住民のグループが中心となり、新たな地域活性化プロジェクトが開始されるなど、徐々に、地域内の取り組みが展開されようとしている地区である。そこで、この地区住民の協力を得て、地域生活プロセス評価手法を導入し、今後、地区内の生活変化の把握、住民に変化をフィードバックすることによって得られる気づきの可能性などを検証していくことにより、本手法の開発を試みている。

本論では、住民主体の地域社会づくりの必要性を論じ、地域生活プロセス評価手法の概要、新潟県長岡市川口木沢地区における評価手法導入の経緯、2010年に実施したベースライン調査結果の概要を記すことにより、地域生活プロセス評価手法について概説する。

2. 当事者主体の地域発展手法の重要性

過疎化が深刻化する中山間地域において、地域活性化は喫緊の課題であり、国・地方ともに地域コミュニティの再生を重要課題の1つに位置づけてきた。社会学者の鶴見和子は内発的發展論を展開（鶴見 1996）し、地域生活者が主体的に自身の地域づくりに取り組んでいくことこそが、地域コミュニティの活性化には重要であること、また、創意工夫のヒントは、土の人（地域に長年定住し、生活を営んできた人）と風の人（外部から移住した人や訪問者）の間の交わり合いや協働が有効であると説いた。また、鶴見は、内発的發展のモデルの1つとして、日本の水俣市の事例をあげており、地域再生のあり方と当事者の主体性の関係に着目することを提起した。

水俣市は、1956年の水俣病発生後、原因企業であるチッソと患者の対立、患者とチッソ労働者の対立、住民同士の対立など、地域内の対立が重層化、水俣産農作物への風評被害、水俣市民へのいわれの無い偏見や差別などに悩まされ、深刻な社会分断を経験（草郷 2009）した。しかし、環境破壊で世界中に名を知られたのであれば、それを逆手にとって、環境に優しい町水俣を実現し、世界に発信することを決意し、環境との調和を目指した斬新な取り組みを展開してきた。その結果、水俣病発見から約半世紀以上経過した2008年に、水俣市は、内閣府が選定した6つの「環境モデル都市」の1つに選ばれたのである。この再生過程の中で、地域住民主体の地域活性化手法である「地元学」が生まれた。

地元学は、1990年代後半から、熊本県水俣市の中山間地域である頭石地区で住民と地方行政の協働によって導入された実践的地域活性化手法である。地元学の特色は、水俣市役所による「元気村づくり条例の制定」、地区単位的环境協定の締結、村丸ごと博物館という地区生活案内活動にある。地元学によって、村まるごと博物館となった頭石地区への外からの訪問者（鶴見和子のいう「風の人」に相当）が増加した。集落への入場者（訪問者）の持つ価値観やものの捉え方は、地区住民のそれとは違うことが多く、訪問者は住民が見向きもしなかったようなものの持つ価値を住民に気づかせてくれた。さらに、住民の中に、風の人が見出した新たな価値を活かしていく気持ちを誘発し、その結果、住民主体の地域づくりへと向かわせていくこととなった。つまり、地元学は、地域住民が外部とのつながりを上手に活かして自らの地域生活を改善していくしくみなのである。実際、頭石地区で

は、地元学導入により、住民の創意工夫が高まり、地域活性化が展開され、「豊かなむらづくり農林水産大臣賞」を受賞するに至った。また、最近では地元学導入事例が全国的に増えてきている（吉本 2008）。

人々の生活改善を目指す開発アプローチの1つに「人間開発」がある。人間開発は、アマルティア・セン（Sen 1992）のケイパビリティ・アプローチ¹⁾に根差すもので、国連開発計画が1990年に人間開発報告書（UNDP 1990）と人間開発指数（HDI）を発表した際に、定義した概念である。それは、実践志向の理論であり、人々の生き方の選択肢を広げることを目指す。そして、長く健康な生活を送ること、知識を増やすこと、適度な生活水準を確保するための資源を手に入れられることを、人々が選択肢を持ち、活用しうるための3つの基本要件とする。また、人々が社会の中で、創造的で生産的な機会を得て、人としての尊厳や権利を保障され、政治的、経済的、社会的自由が与えられていることをも重要とする考え方である。

人間開発の尺度として開発された人間開発指数（HDI）は、人間開発の考え方をすべて代替するものではないが、上記の人間開発に必要な不可欠な要素である経済、教育、健康の3領域の状況を評価する。したがって、HDIが高い社会では、より良い生活を営む可能性が高まるものの、ケイパビリティ・アプローチが目指す社会を必ず実現するとは言いきれない。ケイパビリティ・アプローチの目指す社会とは、個々人の出自、階級、性別、障がいの有無などを理由に生き方の選択肢が大きく歪められてしまうことのない社会であり、個々人の持つ力（潜在的な可能性）を伸ばすことのできる個別の生活環境とその力を活かしていける多様な選択肢を提供できる社会を指すからである。

センとともに、ケイパビリティ・アプローチを主唱してきたマーサ・ヌスバウム（Nussbaum 2000, 2011）は、ケイパビリティを3つの種類に分けて説明している。まず、個々人の持って生まれた能力を「基本的ケイパビリティ」と呼ぶ。これは、生まれながらにして備わっている力、たとえば、「あ、が、と」などの音声であり、手足を動かして、「ハイハイ」をするなどである。このままでは、生き方の選択には自ずと限界があるが、これらの音声を組み合わせて言語を操れるようになれば、自らの感情、意志、概念を他者に伝えることができる。また、肉体を鍛え、ルールを理解できるようになれば、各種のスポーツ競技ができるようになる。このように基本的なケイパビリティを活用して獲得される個々人の力を「内的なケイパビリティ」と呼ぶ。その意味では、学校教育の果たす1つの役割は、内的ケイパビリティを高めることであるといえるだろう。しかし、内的ケイパビリ

1) 潜在能力アプローチと訳されているが、本論では、ケイパビリティ・アプローチを使用する。

イを伸ばすことができたとしても、実際に、社会の中で、内的ケイパビリティによって開かれた生き方を必ずしも選択できるわけではない。それは、自らが生活する社会環境によって、個々人の生き方の選択肢の幅が制約されることがあり得るからである。たとえば、日本においても、男女雇用機会均等法が制定される前は、男女間に採用面で公然と違いが認められていたように、法制度の有無によって、選択肢の幅が異なるのは、その一例である。内的なケイパビリティによって、選びうる生き方の選択肢（職業、結婚、人間関係の結び方、社会づくりなど）の幅を広げ、それを実際に実現していける社会環境が組み合わさってこそ、実際に選択の自由度が保障される。ヌスバウムはこの組み合わせのケイパビリティを「統合的ケイパビリティ」と分類した。

地域コミュニティの発展を考える時、ケイパビリティの考え方から地域社会のあり方を検討してみるとどうなるだろうか。生活当事者である一人一人の地域住民の持つ力を伸ばしていける生活地域であるかどうか、個々の住民の生き方の選択肢の幅が広がっていく地域社会なのかどうかという点を評価していくということである。

先述した地元学が頭石地区に与えた影響は、他でもない、ヌスバウムの言う統合的ケイパビリティを「地域」内にもたらした。地元学を取り入れたことで、地域住民が地域の持つ資源を見直し、その資源の活用方法を見出すことにつながった。その結果、住民自身でやれることを選択肢が広がり、実際に新しい何かを始めることができるようになった。例を挙げると、地区の女性グループによる地元食材食品加工共同グループの立ち上げであり、このグループは、製品生産、販売などのビジネスを開始した。そして、同時に、この新しい活動を後押しする地域社会性が醸成されていったのである。この過程こそ、統合的ケイパビリティの発現であるといえるだろう。

水俣再生を主導してきたような住民主体の地域コミュニティデザイン手法に対して、より大きな期待が寄せられている。それは、生活当事者である地域住民のケイパビリティを高め、よりよい生活状態を実現しうることへの期待でもある。

現在、東日本大震災からの復興という重く大きな課題に直面する日本社会であるが、これまでに、地震や台風によって被災した地区で地域復興に取り組んできた数多くの経験がある。その中には、中越地震によって、甚大な被害をうけた地区も含まれ、水俣の地元学に似た住民主体の地域づくり活動が開始されようとしている。問題は、このような地域主体の取り組みが、地域固有性を尊重しつつ、住民のケイパビリティを高めていけるのかどうかを確かめつつ発展していくことであり、そのような実践的支援手法の開発が必要とされている。

次に、被災後の復興過程における地域社会の変容過程に着目し、住民による主体的地域活性化の取り組みが開始されてからの地区生活の変容を住民の視点から評価していく実践的手法の試行地区と住民視点の地域生活プロセス評価手法を説明する。

3. 新潟県長岡市川口木沢地区の事例：中越地震からの復興の歩み

木沢地区は、旧川口町（2010年3月31日に長岡市に編入合併）の北部標高300メートルに位置する山間集落である。豊かな自然に恵まれ、その美しい棚田は日本の原風景とも呼ばれる。日本有数の豪雪地でもあり、冬季間の積雪は優に3メートルを超える。この木沢地区を震源として、2004年10月23日午後5時56分、新潟県中越地震が起こった。村からふもとの役場に続く道は崩落により遮断されたが、木沢の人たちは自分たちで道を切り開いて、孤立をまぬがれた。地震直前には、52世帯138名の人々が暮らしていたが、地震をきっかけに村を離れた人が多く、2011年11月1日現在で36世帯77名の人が生活を送っている。高齢化率も地震前の35%から50%を超えるまでに増加し、地震前から地域の課題であった高齢化は一気に深刻なものとなった。そうした状況の中で、地震や過疎に負けないで地域に元気や夢をつくろうと、2006年4月、地域づくり団体「フレンドシップ木沢」が活動を始める。人々は、地震により多くのかけがえのないものを失ったが、同時に気づいたものや得られたものもあった。それは、地震直後の自力復旧道路に代表される村の中での団結であり、避難生活中の人のあたたかさであり、そして村での再建を決めた時の「故郷である木沢がやっぱり好きだ」という気持ちだった。それらに加えて、地震後に、多くの人々が村の外からやってきた。中越地震後に設立された民間の中間支援組織であった中越復興市民会議らを通して、大阪や長岡から大学生のボランティアがやってきたのだ。都会に生まれ育った彼・彼女らにとって、木沢の自然や暮らしはどれも驚き感動するようなものばかりであった。大学生らとの交流を通して、木沢の人たちは自分たちの足元にあった豊かさ気づいた。村の中にあった宝ものに気づいた木沢の人々は、それを行政や誰かに頼るのではなく、自分たちの手で守り育てていくことにした。地震で崩落した集落の背後にそびえる二子山の遊歩道は、「地震のときのように」自分たちの手でなおした。春には、山菜採りツアーをひらいて外の人をもてなしはじめた。夏の盆踊りは、村の中だけでなく、外の人とだけでなく、近隣の村々との関係も大切だと「二十村郷大盆踊り大会」という合同盆踊りもはじめた。自慢の盆太鼓は、お盆だけでなく、秋の大学祭でも出張して披露するようになった。地震前から晩秋にひらかれていた集落内の交流事業である「よりあいっこ」には、震災後に出会った人たちも顔を見せるようになった。震災の記憶と復興の原点を記そ

うと、村人の手記を集めた記録集もつくった。震災後の助け合いや村の豊かさをつたえる「防災キャンプ」も始まった。それだけでなく、学生とのまちあるきなどで気づいた村の宝ものをしるしたマップをつくった²⁾。先祖から受け継いできた屋号を通して、もう一度自分が木沢に住んでいる意味を再確認しようと素晴らしい屋号看板も各世帯に掲げられた。そして、これらの様々な事業を行いながら、木沢の将来はどうあってほしいのか、そのためには今何が出来るだろうかと、冬季間には毎週会議を開いて議論をした。これらの議論から、「体験交流事業を通した定住促進と永住促進」という活動目標と「フレンドシップ木沢復興7カ条」が生まれた。この「定住・永住」の主語は、今木沢に住んでいる人と将来木沢に住む人のどちらも含んでいる。そして、この体験交流事業の拠点として、地震直前に廃校になっていた「旧木沢小学校」が、2010年4月29日、「朝霧の宿 やまぼうし」としてリニューアルオープンした。お客を迎え入れて宿泊施設を運営するという初めての経験に試行錯誤をしながらではあるが、順調に運営を続けている。このように、木沢地区では、地震後の様々な出会いや出来事を通して、単に地震以前の状態に戻るのではない、地震と過疎の両方からの復興を目指して取り組みが進められており、その成果を着実なものにしていくことが重要になってきている。

4. 当事者による地域生活プロセス評価の必要性

震災から7年が経過したが、木沢地区で暮らす人々の目に映る生活とはどのようなものであろう。地域復興や再生の状況をふりかえるときに、当事者自身の生活に変化が起きているのかどうか、変化が起きている場合、どのような内容の変化なのか、どの程度のものなのかを確認していく手段があれば、それは今後の復興や再生への取り組みを考えてく上での助けになる。当事者（住民）自身の主観的な評価を交えることによって、地域内で起きる変化を把握し、当事者自身で生活改善の取り組みを評価することで、地域復興や再生がうまくいっているようであれば、それに自信を持つことができる。あるいは、何らかの課題が見つかれば、それを反省することから、活動内容を軌道修正する方策を見つけ出す契機とし、自分たちの手で生活を変えていくことにもつながりうる。では、地域生活プロセス評価手法とはどのようなものなのかを概説してみよう。

2) なおフレンドシップ木沢が地震後に活動をはじめ、大学生らとの交流を経て、活動の目標を定めていく過程については、宮本・渥美（2009）や宮本・渥美・矢守（印刷中）で詳しく論じている。

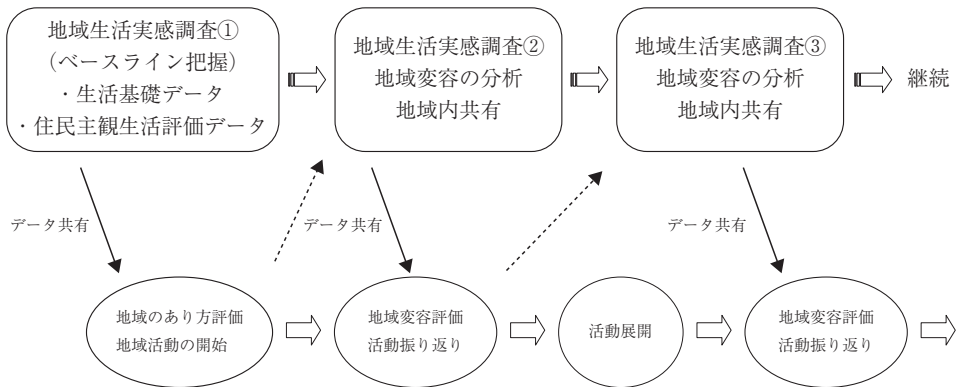


図1 地域住民による地域生活プロセス評価システム

4-1 住民主体の地域生活プロセス評価のしくみ

地域生活プロセス評価とは、地域住民の持つアイデアを引き出して、地域活性化の取り組みを策定、その実践を促すことで住民主体の地域活性化を促すしくみである。この評価のしくみを導入することで、住民自身で地域内活動を振り返り、活動の見直し、新しい活動の提案、その実践の改善を促すプロセス評価（草郷 2007）の1つである。

本構想の概略（図1）を示すと、まず、住民自身による生活全般への評価を収集、整理、分析し、その結果を住民にフィードバックする。これをベースラインと呼ぶ。ベースラインを把握したら、定期的に同内容のアンケート調査を実施することで、ベースラインからの変化を確かめる。この変化をもとにして、住民自身で地域生活の良し悪しを分析し、地域生活評価を進めていくことができる³⁾。住民同士で生活評価をすることで、肯定的に評価される面があれば、それを今後もいかにして伸ばしていくのかを考えていくことができるであろうし、他方、いま一つと評価される点が見つかれば、それをどうやって解消するのかを検討していくことができる。住民自身によって、自らの地域生活の変化を把握し、変化の内容（方向性と変化の幅）をもとにして、これからの取り組み内容を検討し、必要であれば、活動内容に手を加えていくことを促していくことを目指している点、つまり、活動の継続性に連動した当事者主体の評価手法であることに特色がある。

3) 草郷・西部（2010）は、「地域ドック」「コミュニティドック」という仕組みを提示している。これは、本論で示している地域生活プロセス評価手法に類似の手法である。

4-2 地域生活プロセス評価手法の実践

今回、設計した評価手法であるが、生活変容の基準（ベースライン）の把握のために、主観的な質問群によるアンケートを作成し、住民個別に地域生活評価調査を行い、木沢地区の生活現状について、住民の視点から評価してみることとした。具体的な調査設計は次のとおりである。

木沢地区で、やまぼうしの委託運営が開始されることとなった2010年を住民主体の地域おこし活動が大きく展開される初年度と位置づけ、木沢地区の生活現状を把握するためのベースライン調査を実施した。調査方法は、地区内の全戸を調査対象とし、調査票を作成、それを持参し、対面調査することにした。高齢者が多いため、文字を大きく、読みやすくするなどの工夫を加えつつ、自身で記入できる方は自己記入を、それが難しい場合には、調査者が回答を記入する方法を採用した。また、調査票の中には、自由回答の質問も加えた。

地域変容を把握するため、2－3年に一度の頻度で、地域生活変容調査を定期的の実施することとしている。そこで、本論では、地震後6年半を経過した木沢地区の生活がどう評価されているのか、今後、木沢の内発的な活動が展開されていくにあたり、地区変容を評価する際の基点となるベースライン調査の結果を紹介する。

5. 木沢地区住民による生活実感

5-1 回答者の属性

ベースライン調査の回答者は総数47名、男性25名（53%）、女性22名（47%）、年齢幅は、18歳から92歳まで、平均年齢は約65歳であった。また、家族構成を同居人数で示すと、24名（51%）が二人暮らし、8名（17%）が三人暮らし、5名（11%）が一人暮らし、5名（11%）が六人暮らし、4名（9%）が四人暮らしであった。学歴別で見ると、28名（59%）が中卒、7名（14%）が旧制尋常小学校卒であった。

5-2 ベースライン調査の結果

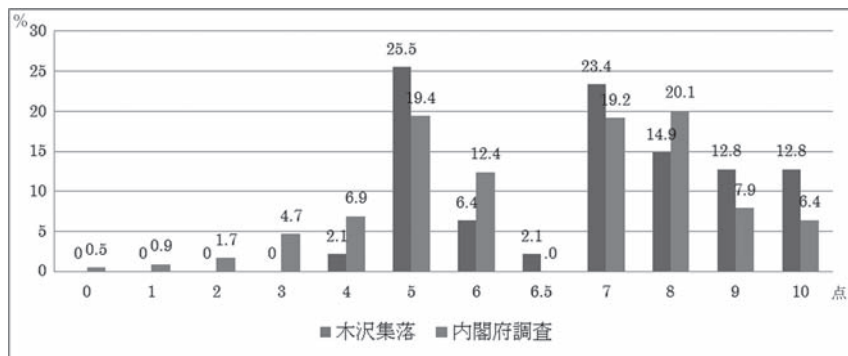
(1) 幸福度

まず、回答者47名の幸福感の度合いを見てみよう。平成21年度に内閣府が実施した国民生活選好度調査⁴⁾（以後、「内閣府調査」と表記する）を用い、設問は次の通りであった。

4) 政府は、この調査結果を「幸福度調査」と称し、その結果を公表した。

「あなたは現在幸せですか?『とても不幸である』が0点、『とても幸せである』を10点とすると何点ぐらいになるとあなたは思いますか、あてはまるものをひとつだけお選びください。」

グラフ1は、木沢住民の回答結果を示している。幸福度の平均値は、7.1点であった。最低4点、最高10点であった。分布図を見ると、5点(25.5%)、7点(23.4%)が多いものの、8点から10点を合わせると4割以上がとても幸福を感じていることがわかる。比較のために、内閣府の調査結果を示しているが、内閣府の結果に比べて、3点以下の低い幸福度であるものの割合は、内閣府調査では、7.8%に達しているものの、木沢地区では0%であった。他方、8点以上の高い幸福度を感じている者の割合は、内閣府調査では、34.4%であり、こちらも木沢地区の方が高い割合(40.5%)を示していた。幸福度のデータの地域間比較には、慎重であるべきであるが、木沢地区における幸福度は、総じて高いということが見て取れる。



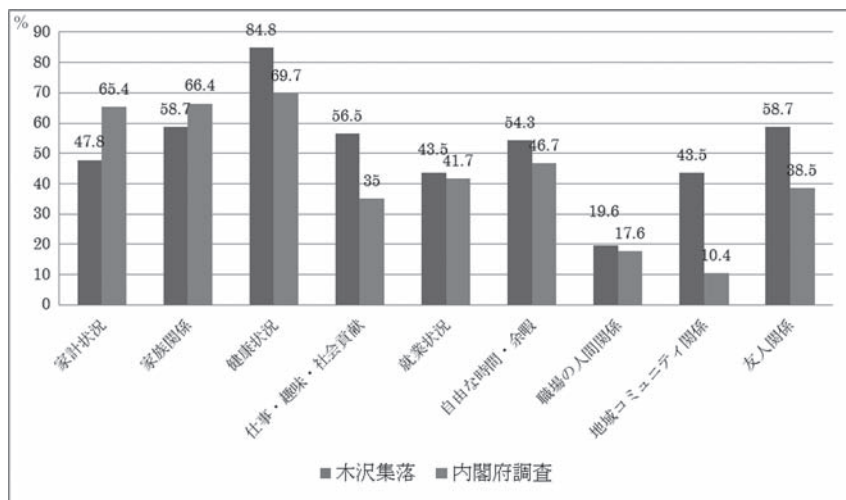
グラフ1 木沢集落と内閣府調査の幸福度 (%)

また、幸福度を左右する要素を探るため、内閣府調査と同様、次の設問を試みた。

「幸福感を判断する際に、重視した事項は何ですか。次の中からあてはまるものすべてに○を付けてください」

回答者は、47名中46名であった。グラフ2は、木沢地区と内閣府調査の結果を示したものである。この結果は、興味深い。木沢地区では、平均年齢が高く、高齢者割合が高いことから、健康状況を重視した割合が高い。内閣府調査では、回答者の6割以上が健康状況、

家族関係、家計状況を重視していた。木沢地区の調査と内閣府調査の対比が明確になるのは、「友人関係」と「地域コミュニティ関係」である。木沢地区では、各々、58.7%、43.5%であったが、内閣府調査では、各々、38.5%、10.4%であった。木沢地区の友人関係重視の割合は家族関係重視の割合が同等であること、地域コミュニティ重視の割合は内閣府のその4倍以上であることから、地域の仲間の存在が幸福につながることを示している。また、中越地震以後の復興過程で知り合うことができた友人が増えてきたことも手伝って、友人関係が幸福を左右する要素として、重要になってきているのかもしれない。



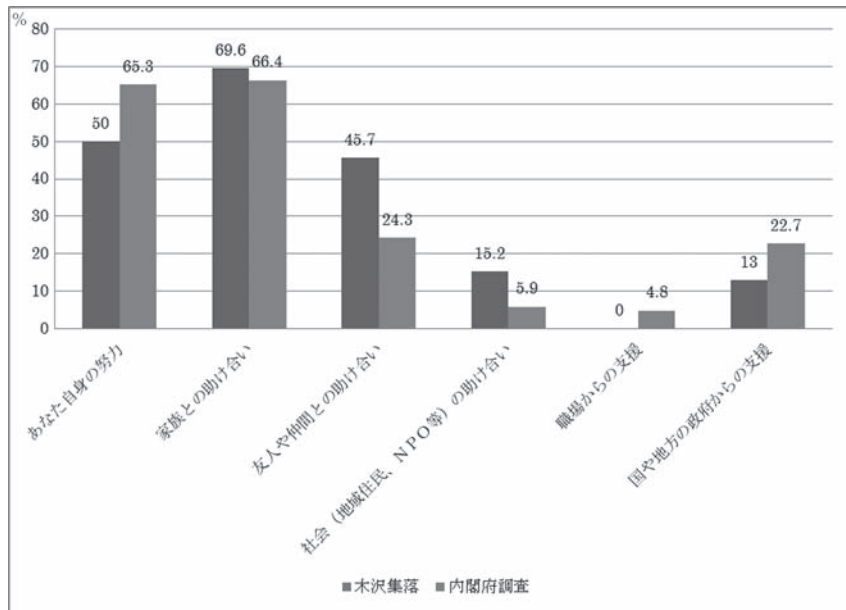
グラフ2 幸福度判断の際、重視した事項 (%)

また、幸福感を高めるための手立てについても、次のように設問した。

「あなたの幸福感を高めるために有効な手立ては何ですか。次の中から、あなたのお考えに最も近いものに2つまで○を付けてください。」

グラフ3に回答結果を示している。内閣府調査の結果からは、家族と自分の努力が幸福感を高めるために有効であると考えていることが見て取れる。それに対して、木沢地区では、家族の助け合いは有効であるとされるものの、友人や仲間との助け合い、地域住民やNPOの助け合いが有効であるとする割合も高い。また、政府の支援の有効性に注目すると、内閣府調査は22.7%に上るが、木沢地区では、13%に過ぎない。中越地震後の復興支援を考えれば、むしろ政府への支援を期待するのではないかと予想されたが、木沢地区で

は、政府よりも、友人や社会からの支援を有効と判断していることは実に興味深い。



グラフ3 幸福感を高めるための有効策 (%)

次に、自由記述欄⁵⁾の回答から、木沢住民の捉える「幸福」を紹介してみたい。設問は次のものであった。

「あなたにとって、幸福であるために必要なことはどんなことだと思いますか？」

47名中45名の回答が得られた。KHCoderを用いて頻出語を調べたところ、3回以上用いられた語として表1のような語句が抽出された。

「健康」は14名の回答の中に16回用いられていた。具体的に用いられていた回答を参照してみると、「自分が健康で、家族が健康でいることだね」、「家族が健康で、まあなんとか元気でくらしていられればそれが幸せなんじゃないかな。そんなふうに思います」というよ

5) 自由記述回答欄についてコーディングを行った。コーディングにあたっては、KHCoderによる頻出語句の分析を通覧した上で定性的コーディングを行った。KHCoderによる語句の抽出の際に、強制抽出語を設定した質問項目については随時示す。なお、コーディングをする際に紹介する具体的な回答例については、すべて当該の質問項目に対する回答者の回答すべてを引用した。ただし、実際にコードを付しているのは、回答中の該当箇所であり、よって一人の回答中に複数のコードが含まれていることがある。原則として回答者の回答をコーディングに該当する箇所のみを切りだして紹介しなかった理由は、この段階の分析では回答者にとってどのような文脈において回答されているのかを明示しておきたかったからである。

表1 幸福に必要なことの自由回答において3回以上用いられた語句

順位	抽出語	出現回数
1	健康	16
2	家族	11
3	自分	6
4	思う	5
5	一番	4
5	元気	4
5	生活	4
5	地震	4
5	暮らせる	4
6	一緒	3
6	嫁さん	3
6	出す	3
6	出来る	3
6	冬	3
6	普通	3

うに、出現回数第2位の「家族」との関係で用いられているものと、「健康と生活、経済の安定、家族の平和な家庭」、「衣・食・住が足りていること。趣味があること。健康であること」のように生活の安定と結び付けられて語られているもの、そして「健康」、「健康とかね。健康第一だね」と、健康のみに言及しているものがみられた。またこれに関連して、出現回数第5位の「元気」について見てみると、先に示した家族の健康と併記される回答や、「皆が元気である事」など、「健康」の語とはほぼ同義で用いられていた。ここから、〈健康〉、〈家族の健康〉、〈生活の安定〉の3つのコードが抽出された⁶⁾。

次に「家族」が用いられていた回答をみると、先に示した「健康」との関連で用いられているものの他に、「家族と仲よく暮らしていけること」、「友達との関係も大事だけど、家族と一緒にいるのが一番いい。家族と一緒に暮らせること」のように家族との良好な関係について用いられているものがあつた。ここから〈良好な家族関係〉のコードを追加した。

「自分」は、先の「健康」と結び付けられて用いられていたもののほかに、「自分の自由なことが出来ること。自分の思うがままに出来ること」と、「1人になると困る。何でも自分でやらないと」の二つの回答があつた。「自分の自由なことが出来ること。自分の思うがままに出来ること」の回答は、組織の中で仕事することに比べて、誰かに指図されるのではなく、自分の時間配分の中で仕事をし、そこに創意工夫をこらして、その結果をまた

6) 以下、付与したコードは「〈 〉」で示すことにする。

享受することに楽しみを見いだすような木沢地区での農業を中心とした暮らしを指していると考えられる⁷⁾。一方で、「一人になると困る。何でも自分でやらないと」の回答は、自分の裁量で出来る仕事のもつ別の側面、つまり何らかの事情でうまく仕事を進められない時に負担が大きいこと、また自分の裁量で出来る仕事を楽しみと感ぜられるためには、何らかの条件が必要なのではないかと思われる。その意味で、〈良好な家族関係〉とも関連しているかもしれない。この自分の裁量で仕事ができることについて、〈自由〉のコードをあてることにする。

「地震」は、「地震で大変しかし、生業である農業の経済が確立しないといけませんが、それも元に戻ってきた」、「木沢で地震が起きたが事故やケガがなく町が復興していること、普通に生活できること」のように「生活」の語とも関連し、生活の安定と結びつけられて用いられていた。「暮らせる」は、先に示した〈健康〉や〈良好な家族関係〉、〈生活の安定〉に関連して用いられていた。

以上のコードに分類されない残りの回答をみると、「仲間うちで飲みに行くこと」、「遊ぶ時間がほぼ毎日3時間以上持てること」、「好きなものがあること」、「趣味があること」の回答があり、これらには〈楽しみがある〉のコードを付した。また「嫌なことをいちいち、嫌と考えない」、「ないものねだりはしない」には、〈悲観的にならない〉のコードを与えた。最後に、いずれのコードにも分類されない「コミュニケーションが円活になった様に感ずる」は、この回答だけではどのコミュニケーションがどのレベルを指しているのか、円滑になったように感じられているのはいつを比較してなのかが分からないため、ひとまずコードは付せずに保留した。

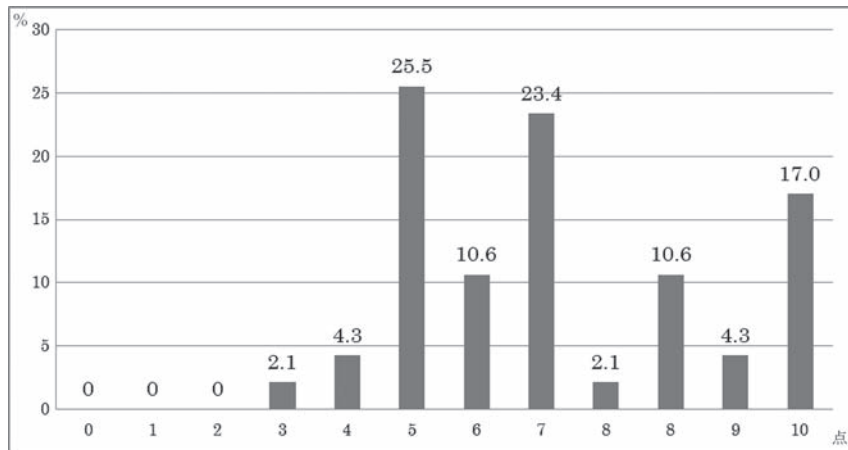
このように、「幸福であるために必要なこと」についての回答は、自身の〈健康〉あるいは〈家族の健康〉、〈良好な家族関係〉、〈生活の安定〉が主なものとして挙げられ、さらに木沢地区での暮らしのあり方に深く結びついていると思われる仕事の〈自由〉、余暇や趣味などの〈楽しみがある〉、そして〈悲観的にならない〉の7つのコードに分類された。

さらに、実際に、どういう時に幸福を感じるかを自由回答で尋ねてみた。コーディング分析をしたところ、〈健康であること〉、〈平穏である事〉、〈家族といる時〉、〈自分の好きなことをしている時〉、〈仕事を終えた時・達成感を得た時〉の5つのコードが抽出された。

7) この回答者は実は大工として長年企業に勤務していた。ここで、回答者の回答をこのように解釈したのは、かつて筆者に「定年後の生活に求めるもの」について、「長年組織の中で働いてきたので、定年してからは誰に指図されることもなく、自分のペースで田んぼに通いながら時間を過ごすことが自分の楽しみだ」と話していたことによる。

（2）満足度

次に、木沢地区の住民の生活に対する「満足度」を見てみよう。アンケート調査では、生活全般と個別の領域について、満足度を尋ねてみた。



グラフ 4 木沢住民の生活への満足度 (%)

生活全般の満足度は、平均で6.8点であったが、その分布（グラフ 4）を見てみると、幸福度と同様に、5点と7点と回答した人が多かった。10点と回答した人も多く、反対に3点と低い点数をつけている人もいた。全般的に、幸福度の回答傾向と似ていることが読みとれる。

今回の調査では、いくつかの項目に細分化し、満足度を尋ねている。図 2 は、個別項目の回答の平均値を示したものである。生活全体の平均値よりも高い平均値を示したのは、自然の豊かさ（8.69点）、食べ物（8.19点）、家庭内の人間関係（7.60点）、住居（7.33点）、木沢地区の人間関係（7.12点）であった。他方、満足度の平均値が低かったのは、老後の世話（5.50点）、所得・収入（5.54点）、健康（5.81点）であった。自然環境や社会環境には満足しているが、過疎化が進んでいる農村集落の生活の不安が満足度の回答の中にも明らかである。とくに、満足度が低かった老後の世話への不安は、若い世代が流出している木沢地区の現状とも関係しており、深刻な悩みであることを示している。満足度の高い項目を活かして、地区の活性化を進めていくことができれば、不安を抱える老後の世話や収入への満足度を高めていけるのかもしれない。

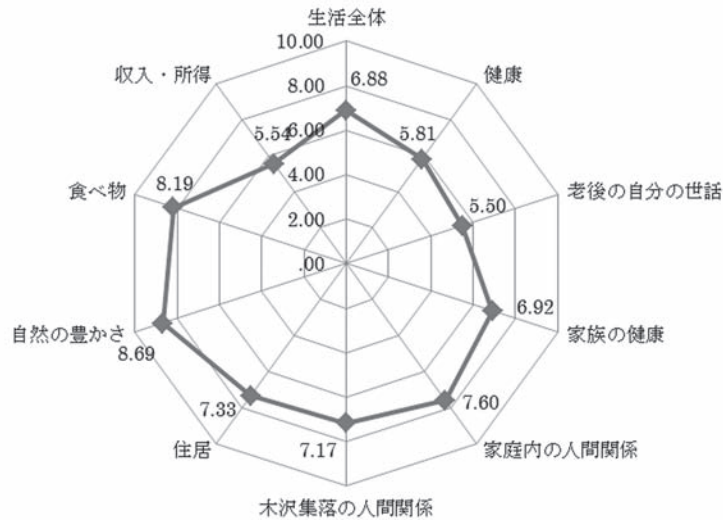


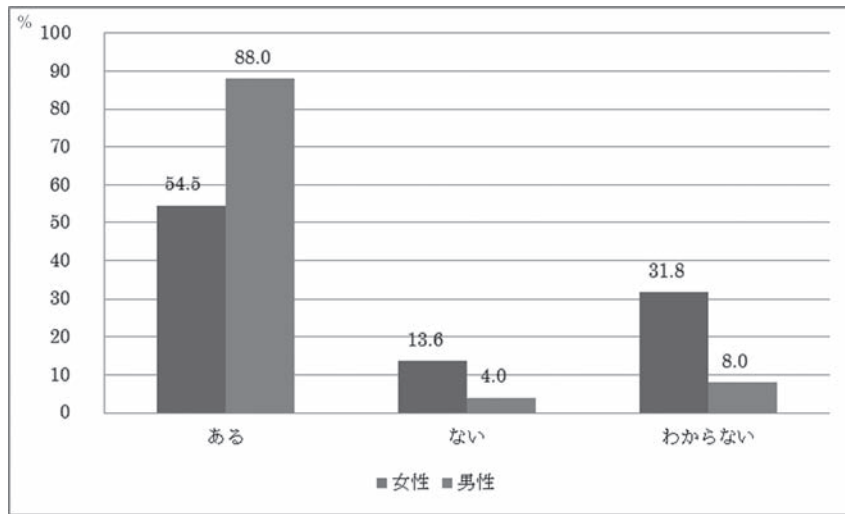
図2 木沢住民の満足度（生活領域別；平均値（点））

(3) 生きがい

アンケートでは、「生きがい」の有無とその中身について尋ねてみた。生きがいがあると回答した人は、47名中34名（72.3%）であった。また、生きがいの有無について、男女間で差異があるかどうかを比較してみた。グラフ5は、生きがいの回答割合を男女別に整理してみたものである。男性で生きがいがあると回答した割合が女性のそれを遥かに上回っていた。生きがいは、人間開発の考え方が重要視する項目でもある。今後、木沢地区の住民、とりわけ、女性住民の生きがいの有無の推移に注目していく必要がある。

具体的な生きがいの中身については、自由回答とした。自由回答は、34名中31名の回答が得られた。KHCoderを用いて頻出語を調べたところ、3回以上用いられた語として表2のような語句が抽出された。

最も出現回数の多かった「自分」という言葉については、「自分の健康だとか、自分の思うことをすることが生きがい。楽しくすること」、「自分の思うように好きなようにできる。おかず好きなように作る。孫やひ孫が来てお金くれる（あげる）」、「自分で幸せだと考えられる。だから自分の考えで幸せをつくっている。私の幸せは頭の中で考えるから、これは私にしかできないことだ。これは私の宝だ。生きがいも一緒に自分で考えている」のように、〈自分のやりたいことが自分で出来ること〉について述べられていた。とりわけ、最後の回答は「自分の考えで幸せをつくること、それは自分にしか出来ない特別なことで、宝



グラフ 5 生きがいの男女別割合比較

表 2 生きがいの自由回答において 3 回以上用いられた語句

順位	抽出語	出現回数
1	自分	10
2	仕事	6
3	健康	5
3	復旧	5
4	考える	4
4	人	4
5	好き	3
5	幸せ	3
5	作る	3
5	思う	3
5	趣味	3
5	出る	3
5	生きがい	3
5	孫	3

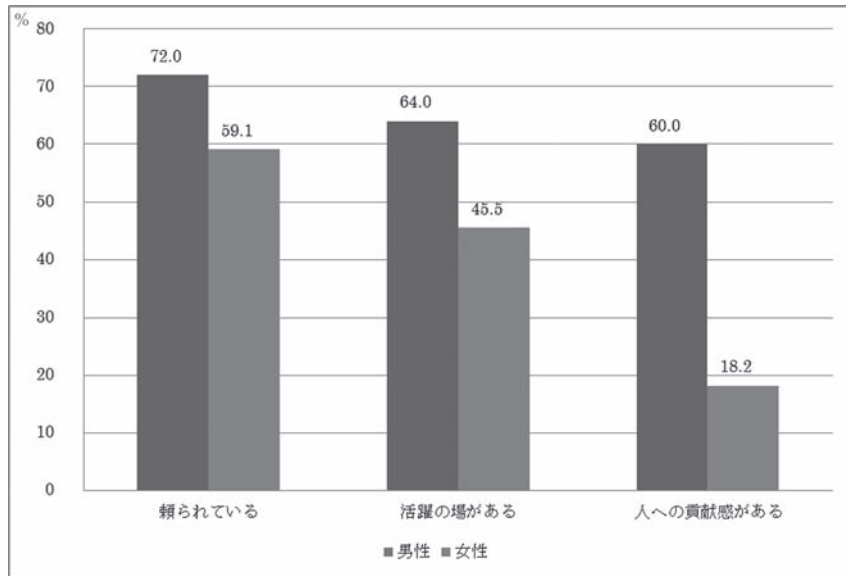
である」という、印象的な回答である。次に、「仕事している時」、「現役引退してからやればなんとかなる」という仕事（農業）を持っていて、それを毎日やっていけばそれこそなんとかなる。何よりも健康であることが一番」のように、〈仕事〉に関するもの、また「健康でいれること。食べものを食べれること。子供、孫が元気」、「健康で仕事ができるから。やっぱ孤立するとだめだね。一人暮らしすると、全てのものがひがむのかね。私も一人に

なっちゃえばあなっちゃうのかな。また、そういう家庭には、誰一人行かねんだわ。お金で解決するうちはいいですね」のように、〈健康〉に関するものがあった。この〈仕事〉と〈健康〉は相互に関連付けて回答されているものもあった。次に、「子どもやまごが達者なこと」、「野菜をつくったり、山菜をとったり、孫たちが遊びに来たりした時」のように、〈子どもや孫〉に関連したものがあった。また、「農業なら農作、囲碁、将棋とかの趣味。百人一首」、「趣味（水彩）に没頭している時」と〈趣味〉に関するものがあった。最後に、「知り合いの役に立った時」、「専門職みたいな仕事についてるんでね、年をとってもあてにされているといつかね、やりがいはある」などの、〈人の役に立つこと〉についての回答があった。以上の6つのコードが抽出されたが、かなりの回答が直接表現していないものの「自分のやりたいことが自分で出来る」というコードに包摂されるように考えられた。

(4) 地域内の信頼、活躍の場、地域への貢献

アンケートでは、木沢地区内において、人に頼りにされているかどうか、活躍の場があるかどうか、また、人に何かをしているという意識（貢献）があるかどうかを尋ねてみた。この回答を男女別に整理してみたものがグラフ6である。これによれば、全ての項目において、男性の割合が高いことが見て取れる。とくに、人への貢献感の差異は際立って大きい。

この結果から、女性よりも男性の方が地域内で果たす役を持っており、それが認知されていることが窺い知れる。したがって、今後の地域の変化を確認する際には、女性自身の評価の推移を注視していくことが重要である。

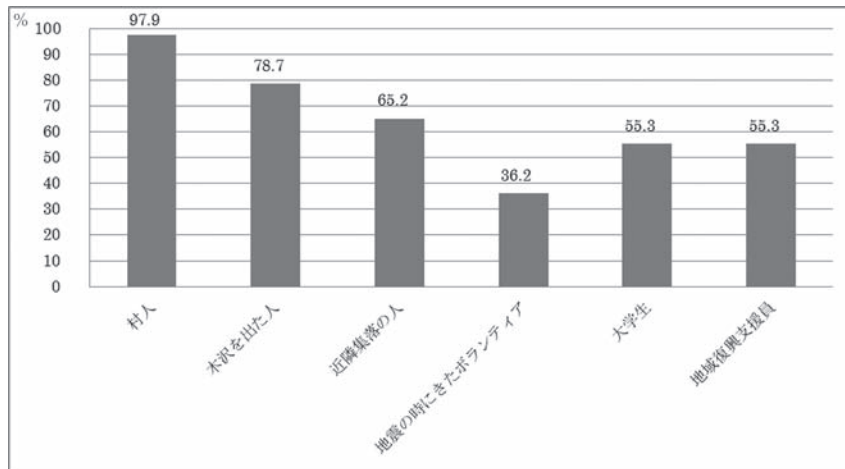


グラフ6 地域内の信頼、活躍の場、地域への貢献への割合（男女別）

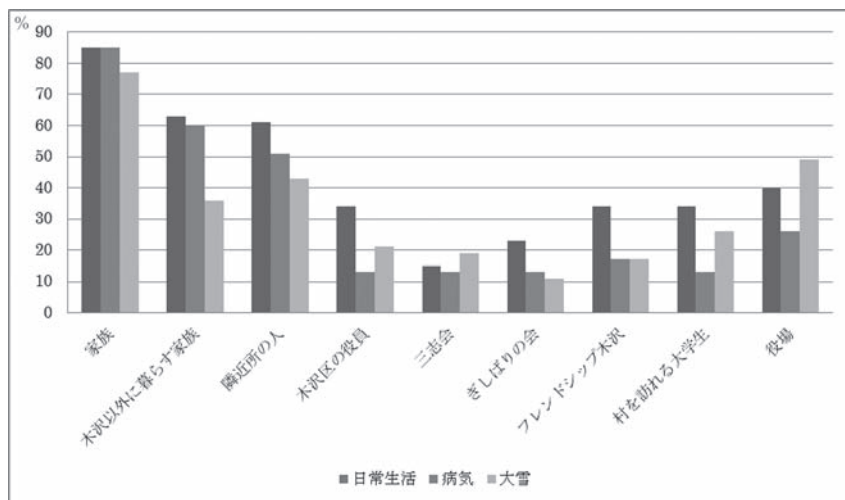
(5) つながり

つながりを考えるには、「つきあいの幅」と「信頼の度合い」の2つの側面から把握していくことが大切である。アンケートでは、交流の有無の割合を対象者別に、また、事情別に頼れる人は誰かを尋ねている。

グラフ7は、交流の有無を相手ごとに尋ねた質問への回答結果をもとにして作成された。これを見ると、木沢地区を離れた人々との交流が高いことがわかる。また、3分の2近くの人が近隣地区の人とのつきあいを保っていることもわかった。注目されるのは、震災後に関係のできたグループ（ボランティア、大学生、地域復興支援員）との関わりが深いという点である。なかでも、大学生とは、地域復興支援員と同じぐらいの割合の住民が交流を持っていると回答した。大学生との接点が増えたことを示している。地域復興支援員との関係は、大学生よりも密接な関わりが想定されるだけに、大学生と同じという結果は、意外である。今後、交流あると回答した人の割合が各項目ごとにどのように変わっていくのか、注意深くみていくことが重要である。



グラフ7 交流の有無の割合（対象別）



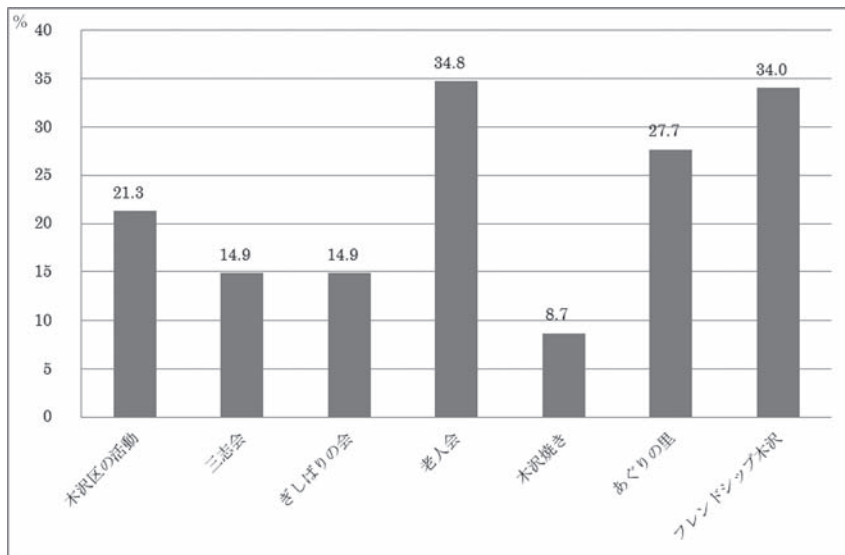
グラフ8 木沢住民にとって頼りになる人の割合（事象別）

グラフ8は、頼りになる人の割合を人や組織別に尋ねた結果をまとめたものである。当然ではあるが、家族、同居の家族への期待が高いことがわかる。また、隣近所の人を頼ることが、地区外で生活する家族と同等に大切であり、大雪の場合には隣近所の人の方が頼れる割合が高い。この結果から、幸福感を考えると、知り合いや近所の人の方が重要であると回答するのも十分頷ける。興味深いのは、村を訪れる大学生を頼りにする割合の高さ

である。不定期に訪問することの多い大学生ではあるが、木沢の住民にとって、単なる訪問者という位置づけ以上の存在感を示していることが見て取れる。日常生活で頼りにできるというのは、住民とは、年齢差の大きい若者との交流の仕方に何らかの特徴があるのかもしれない。今後の木沢地区と若者とのつながりを見ていくことは、地区の変化を追っていく上で貴重な視座を提供してくれる可能性がある。

(6) 地域活動への参画

木沢住民の地区活動への参画度合いを確認するために、7つの地区活動に関して、会員であるかどうか、木沢地区内の活動への参加や重要性の観点から質問した。



グラフ9 木沢集落内の地域内グループ⁸⁾ 会員割合 (%)

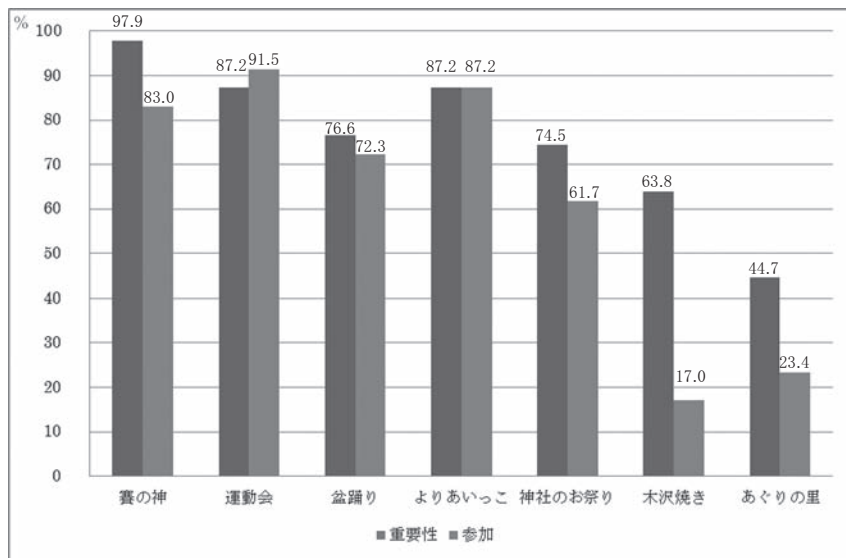
グラフ9は、回答者47名のうち、どれくらいの割合が地域内のグループ活動に会員として関わっているかを示したものである。これを見ると、老人会とフレンドシップ木沢の会員割合が高い。あぐりの里には、4分の1以上が参加していた。老人会の会員割合の高さは、高齢化が進む木沢地区においては、自然なことであるといえるが、フレンドシップ木沢への参画割合が高くなっているのは注目に値する。なぜなら、フレンドシップ木沢は、

8) 三志会は、かつての青年会で木沢に住む壮年期の男性で構成される会である。ぎしばりの会は、木沢に住む女性で構成される1種の婦人会である。木沢焼きグループは、陶芸を目的にした趣味の会で、木沢集落外の人もメンバーに含まれている。フレンドシップ木沢は、集落活性化を目的に木沢集落に住む有志で構成される地域づくり団体である。

木沢地区の地域活性化に取り組む歴史の浅い自主グループであるからである。そのグループへの参加割合の変動に注目していくことは、今後の木沢地区の変容を見ていく上で重要な物差しの1つになると思われる。

木沢地区では、様々な年中行事が行われている。住民にとって、どの行事や活動が重要なのか、実際に足を運んで、参加したのかについても確認してみた。グラフ10は、回答者による地域行事・活動の重要性と参加度を示したものである。

これを見ると、重要と考えている行事は、賽の神（地区主催で小正月に行われる火祭）、運動会（地区主催の地域運動会）、よりあいっこ（地区主催で、地区内の交流・親睦を目的に行われる晩秋の催し）、盆踊り、神社の祭りの順である。これらは、地区の住民が数多く関わる行事であることから、その重要性が高いことは納得できる。木沢焼やあぐりの里は、限られた住民にとって関心の高い行事であるため、重要と考える割合は低くなっている。参加したかどうかは、運動会とよりあいっこの割合が高い。木沢焼やあぐりの里への参加割合はかなり低くなっている。今後、木沢地区内の地域活動がどのように変化していくのかによって、既存の地域行事や活動への関心、意義、参加率などがどう変化していくのかを見ていくことが大切だろう。



グラフ10 地域行事・活動の重要性・参加度の割合

（7）地震によって変わったこと

木沢地区における生活変化を把握するためには、2004年に発生した中越地震が同地区にもたらした影響について、確認しておくことが役立つと考え、次のような自由記述の設問を試みた。

「地震前の木沢地区と、地震後の現在の木沢地区では何か違いがあると思いますか？」

47名中43名から回答が得られた。KHCoderを用いて頻出語を調べたところ、5回以上用いられた語として表3のような語句が抽出された。

最も出現回数の多かった「人」、次に多かった「減る」は共に地震後に人口や世帯数が減ったことに関連づけて回答されていた。具体的には、「がくっと人口が減った」、「人間の数と家の数が減った」、「小部落になって、なんていうんだかさびしい」などがあり、〈人間の数〉とした。次に、人口が減ったこととともに村の中のまとまりが強くなったという回答があり、具体的には「集落の戸数が減った。地震後の絆がしっかりした」、「人口は少なくなったけど、団結力、まとまりが良くなった」、「木沢地区のまとまりもそうだが、他の集落も、まとまりが良くなった。助け合うようになった。人が多く来るようになった。活動が増えた」など、他集落との関係も含めて言及されていた。逆に、地震後に人間関係が疎遠になったというものもあり、「第一に人間関係が違ってきた。人間関係がはっきりとわかると思うな。地震直後はあいさつもしなくなった。最近は徐々に自然な方向に向いてきていると思うなあ」、「前ほど村の本当のまとまりがなくなった。口先ではいいこと言ってるが、やってることばらばら」という回答があった。これらはともに、〈人間関係〉のコードを付した。また、人間の数が減ったことと関連し、「仲間が居なくなったし、お茶会などが無くなった」、「地震で集落の人が出て行きたくなくても出ていかざるを得なかった。仲いい人達が外に出てしまった。人は離れると関係が変わってしまう」など、仲間がいなくなってしまったという回答があり、〈仲間〉とした。また村内の人間関係ではなく、村外の人との交流についての回答もあった。具体的には、「人とのつながりが広がった。人とのふれあいとか交流とか」、「東京から『いなかにとまろう』の小中学生がくるようになった ボランティアの人もくるようになった 大学生がくるようになった」、「フレンドシップ、山ぼうしとかイベントが増えた。それまではなかった」、「外部との交流が格段に増えた」などの回答があり、〈外部との交流〉とした。また、「木沢の前と違って、道路が整った」、「道路」と、〈道路〉に関するものがあった。これらの一方で、「それ程大きく変わったとは思わない」、「地震前でも今だってそんなに変わんねえと思うんだけど」という〈変わらない〉

という回答もあった。

表3 地震の影響に関する自由回答において5回以上用いられた語句句

順位	抽出語	出現回数
1	人	18
2	減る	12
3	地震	12
4	集落	7
5	人間	6
6	多い	6
7	変わる	6
7	家	5
7	子ども	5
8	思う	5
8	前	5
8	来る	5

(8) 悩みや不安

木沢地区の住民には、どのような不安があるのだろうか。この点についても、ベースライン調査の中で確かめてみた。設問は、次の通りである。

「あなたは、日頃の生活の中で、悩みや不安を感じていますか、それとも、悩みや不安を感じていませんか。」

47名中30名が悩みや不安を感じていると回答、6割以上が悩みや不安を持っていることがわかった。具体的にはどのような悩みなのか、自由に記述してもらった。そこで、30名中26名の回答をもとに、KHCoderを用いて頻出語を調べたところ、3回以上用いられた語として表4のような語句が抽出された。

回答は、「いつまで、この家を保てるのかどうかへの不安」のように、〈家の存続〉に関するもの、「仕事の数がないことが一番の不安」、「生活の安定」など、〈仕事・生活の安定〉についてのもの、「冬の雪がやだ」の〈雪〉に関するもの、「くるり成仏できるか」、「老後の生活」などの〈老後の生活〉に関するもの、「母親の事、子供の事、だんなの足の具合」、「子どもや孫が元気でいられるか」のように〈家族〉に関するもの、そして「1つは、健康的な事。朝、みんなの顔を見て、ホッとする」、「腰が痛くてどうしようもない。糖尿病。血圧」、「足が痛くなって動けなくなるのが一番（不安）」などの〈健康〉に関するものがあった。興味深かったのは、「くるり成仏できるか（ポックリ死にたいということらしい）」、

「死後の地獄の様子を見たい」のような、いかに死を迎えることができるのか、その後の世界はどうなっているのかについての回答が見られたことである。

表4 悩みや不安の自由回答において3回以上用いられた語句

順位	抽出語	出現回数
1	不安	9
2	いつ	3
2	家	3
2	健康	3
2	今	3
2	仕事	3
2	子ども	3
2	生活	3

(9) 木沢地区の暮らしの良い面と悪い面

さらに、今後の地域社会の推移を確かめていくために、住民のみなさんから、木沢地区において生活する中で感じている良い面と悪い面について、自由に回答してもらった。ここで、それらを紹介しておきたい。

「木沢地区での生活について、良い面と悪い面を教えてください」の「良い面」について

47名中39名の回答が得られた。KHCoderを用いて頻出語を調べたところ、3回以上用いられた語として表5のような語句が抽出された。

意外にも、最も出現回数の多かったものに、「空気」と「人」が並んだ。前者には、「空気がいい。見晴らしがいい」、「(雪以外は) あとはみんないい。景色も空気も」、「空気や景色がめちゃくちゃ良い。静かで落ち着く」のように、景色と一緒に用いられていたものがあつたが、コードは〈空気〉と付した。後者には「人間味豊かで穏やかでいれる」、「小さい集落で家族のような付き合いができる」、「誰とも気軽に話しかける」などの回答があり〈人間関係〉とした。さらに、「時間がゆっくりと流れている」、「ゆったりとした時間の中で過ごせること。隣の家と離れていて(適当に)プライバシーが保たれる事。近所のつながりがある」のような〈時間の流れ方〉や、「都会と違って自分で何でも作る所」、「金がかからない」のように〈生活のあり方〉についてのもの、また「空気うめえ。静か」、「自然が豊か 静かで良い」のように〈静か〉であるというもののよう、空気や人間関係、時間、生活様式、音と、眼に見えないものが多く答えられた点が興味深い。もちろん、その

一方で、「景色は良い。木沢いいとこだよ。春と夏と秋。かわりめるときカメラマンがよく来る」のような〈景色〉に関するもの、「景色良くて、山菜が取れること」の〈山菜〉、「地下水。おいしい水が飲める。タテ井戸」の〈水〉についてのもの、「自然が一杯。人の輪、それから土質のよさがあり、田んぼには最高」のような〈自然〉についてのものもあった。

表5 木沢地区の良い面の自由回答において3回以上用いられた語句

順位	抽出語	出現回数
1	空気	5
2	人	5
3	良い	5
4	景色	4
5	自然	4
5	多い	4
5	作る	3
6	自分	3
6	静か	3
6	野菜	3

「木沢地区での生活について、良い面と悪い面を教えてください」の「悪い面」について

47名中39名の回答が得られた。KHCoderを用いて頻出語を調べたところ、4回以上用いられた語として表6のような語句が抽出された。

最も出現回数の多かったのは、「雪」で、39名中18名が回答していた。具体的には、「雪の量が多い」、「雪が降ること」、「冬は本当にさびしい。雪」、「雪が多い。冬が大変なんだよね。やっぱり雪がねー。雪のために出費がかさむ。ロータリー、スタッドレスタイヤ、4WDの車がいる。屋根の修理も。雪に対する経費がかさむ」などの回答があり、4番目に多かった「多い」や5番目に多かった「降る」と共に用いられていた。これらの回答には、〈雪〉のコードを付した。〈雪〉とも関連して、交通の不便さについて述べられたものもあった。具体的には、「豪雪による交通の不便さ」、「交通の利便性。(まあ良くなり過ぎても、うるさくなるけど)」、「仕事をするのも、遠くまで行かなければいけないのが、すごく不べん」などの回答があり〈交通〉とした。5番目に多かった「若い」という言葉については、「若い人がすごく少ないので、これからが不安」、「若い人に嫁がいない。だから子どももいない。このままだと絶滅してしまう。嫁を10人くらいつれてきてもらいたい」、「若い人がいないから、年寄りばかりで活気がない」などの〈高齢化〉に関するものがあった。

表6 木沢地区の悪い面の自由回答において4回以上用いられた語句

順位	抽出語	出現回数
1	雪	19
2	人	8
3	悪い	7
4	多い	6
4	冬	6
5	降る	5
5	若い	5
6	嫁	4
6	行く	4
6	面	4

また、「まとまりがないね。企画みたいなものをするときはやってくれるけど…全体的にみるとまとまりがないというか協調性がない（外に出てた人間なのでそう見える）」、「仲良くしているのとで、よそから嫁に来ている人たちと、別れる気がする。私たちより（歳が）上は、村から村へ嫁に行ってるんで、言い伝えを守るような感じ。下は、よそから来た人で、時代は変わっているって考えている」など、主に村の外に出たことのある人や村外からやってきた人に感じられている〈人間関係〉に関するものがあつた。

6. まとめ：継続調査の展開に向けて

本論文は、日本で喫緊の課題の1つとされている住民が主体性を持って地域コミュニティ活性化を進めていくという課題に焦点をあて、地域活性化活動を当事者の視点で評価するしくみとして、「地域生活プロセス評価手法」を提案し、新潟県長岡市川口木沢地区における試行について、ベースライン調査の概要とともに紹介してみた。

ベースライン調査を行った2010年度から、木沢地区では、地区内の廃校利用宿泊施設「やまぼうし」の運営を受託、木沢住民主体の地域おこしプロジェクトが開始されている。このプロジェクトの展開によって、今後、木沢地区がどのように変容するのかを把握するために、今回のベースライン調査を基に、地域生活プロセス評価調査を定期的 to 実施し、地区生活の変容とそのプロセスを追跡していくことが重要である。また、プロセス評価で得られた結果を生活当事者である木沢地区住民と共有していくことにより、集落内の地域活動の振り返りや改善を促すかどうかを確かめることで、地域住民主体の取り組み支援ツールとしての地域生活プロセス評価手法の有効性を精査していくことが求められている。

参考文献

- 草郷孝好 (2007)「アクション・リサーチ」小泉潤二・志水宏吉編『実践的研究のすすめ』有斐閣 251-266.
- 草郷孝好 (2009)「開発学にとっての繁栄、幸福と希望の意味」東京大学社会科学研究所・玄田有二・宇野重規編『希望学4：希望のはじまり』東大出版会 75-105.
- 草郷孝好・西部忠 (2010)「進化主義的制度設計と地域ドック」江頭進・澤邊紀生・橋本 敬・西部忠・吉田雅明編『進化経済学 基礎』日本経済評論社 266-274.
- Sen, A. K. (1992) *Inequality Reexamined*, Clarendon Press. 池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳『不平等の再検討——潜在能力と自由』岩波書店 1999.
- 鶴見和子 (1996)『内発的發展論の展開』筑摩書房
- Nussbaum, M (2000) *Women and Human Development: The Capabilities Approach*, Cambridge University Press: Cambridge. 池本幸生・野口さつき訳『女性と人間開発 潜在能力アプローチ』岩波書店 2005.
- Nussbaum, M (2011) *Creating Capabilities: The Human Development Approach*, Belknap Press of Harvard University Press.
- 宮本匠・渥美公秀 (2009) 災害復興における物語と外部支援者の役割について～新潟県中越地震の事例から～実験社会心理学研究, 49, 17-31
- 宮本匠・渥美公秀・矢守克也 (印刷中) 人間科学における研究者の役割——アクションリサーチにおける「巫女の視点」—— 実験社会心理学研究
- UNDP (1990) *Human Development Report*, Oxford University Press: New York.
- 吉本哲郎 (2008)『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書 岩波書店

本論文は、関西大学平成22年度学研究助成基金（奨励研究）、独立行政法人日本学術振興会科研費挑戦的萌芽研究（No.23652186）および、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成22年度～平成26年度）の助成を受けた成果である。

—2011.12.10受稿—